よりよく生きる喜びを

渡辺和子

渡辺和子は、一九二七年二月十一日、旭川で生まれ、三歳まで暮らした後、父の転勤で東京に移りました。

〔「強く、しなやかに」より〕
〔山陽新聞社蔵〕

九歳の時、大好きだった父親を亡くし、その後の母のしつけは大変厳しく、我慢と努力の大切さを常に説かれました。「なんでもやるからには一番になりなさい。」と、勉強についてはテストの成績が百点でないと家に入れてもらえない程でした。和子は言われた通りに頑張り、高等女学校での成績は常に一番でした。

しかし、いつしか負けん気が強く、勉強ができる優越感から、時に友人を見下してつらく当たるようになり、そんな自分にほとほと嫌気がさしてきました。

当時、日本は戦争中で、東京でも空襲が始まり、死が身近にありました。もし「死ぬのなら、このままの私では嫌だ。もっと謙虚で心の温かい人に生まれ変わりたい。」と強く願うようになり、キリスト教の洗礼*を受ける決心をしました。

さっそく、高等女学校時代の恩師である日本人シスター*のマダム・セント・ジョンに相談したところ、一冊の聖書を手渡されました。和子は数か月の間、毎日聖書を読んで勉強しました。人生の目的を失っていた和子にとって、聖書の教えに救われる思いでした。

その後、和子は聖心女子大学外国語外国文学科に進学しました。学長からは、「人の一生は、親が偉かったとか、財産がどれだけあったとかに関係なく、その人がどう生きたか、どう考えて決断し、どう行動したかが大切である。」ということを学びました。特に、大学の講義の中では、和子が他者と異なる考えを発言したとき、学長から「なぜ。」とよく問いかけられました。その問いにきちんと答えられなければ、相手を納得させることなどできないと学長は考えたのです。そこには、学長の「自分の意見を主張できる人になりなさい。」との願いが込められていました。

最初は、臆していた和子も、「はい。」か「いいえ。」かをはっきり示し、理由を説明することができるようになっ

ていきました。

また、当時の和子は、厳しい家計を助けるためのアルバイトと学業との両立に苦慮していましたが、専門の英語を使う原稿校正などの事務仕事に運よく出会えました。

外国人の上司は仕事に責任をもって取り組む人であり、「出来上がりにミスが一つでもあったら、これが最後の仕事になると思ってください。」と和子に伝えていました。

ある日、苦労して仕上げた原稿にミスが見つかり、一からやり直しを上司に命じられることがありました。和子は、悔しくて涙を流しましたが、そのことを通じて、「涙より大切なこと。それは自分の失敗を客観的に見つめ、次の機会に生かすということ。それが責任をもつということの意味であり、責任の重さだ。」と感じ、働くことの厳しさや大切さを学ぶことができました。

和子の大学時代は、勉強とアルバイトで大変忙しい日々を送っていましたが、「わずかな時間を見い出して、その時その時で自分にとって、最も大切なことをする。その連続だったが、とても貴重な時間だった。」と当時を振り返っています。

一九五一年、和子は、聖心女子大学を首席で卒業し、上智大学に事務職員として採用され、同時に同大学の大学院へ進学しました。

和子は、仕事の中で、自分の意見をはっきりもち、生き生きと働くことで、次第に自分に自信がもてるようになりました。自らを価値あるものとして見ることができ、それにふさわしい責任を自覚することで、成長を実感することができました。

また、和子は、職場で笑顔の大切さと笑顔の力を教わりました。ある時、職場の同僚に「笑顔がすてきですね。」と言われた和子は、素直に喜びを感じました。幼少期から笑顔が少なかった和子にとって、同僚からの言葉は、他人への思いやりや自分自身の心の潤いとしての笑顔の大切さを知ることにつながりました。そして、「同僚の評価にふさわしい人になろう。」と思い、人生を笑顔で生きるという決意をしたのです。

一九五六年、二十九歳になった和子は、これまでに出会った神父*やシスターたちの献身的な姿に惹かれ、ナミュール・ノートルダム修道女会*に入会しました。シスター見習いとしての共同生活は厳格で、朝から晩まで規則に縛られ、単純作業の繰り返しと祈りをささげる毎日でした。しかし、

ここで音を上げるわけにはいかないと自らに言い聞かせながら、努力する日々が続きました。

一年半後、和子にアメリカのボストン郊外にある修練院*への派遣の命令が下りました。アメリカの生活でも、掃除や洗濯、アイロンがけといった単調な仕事ばかりでした。

ある日、指導に当たっていた修練長が、「あなたはお皿を並べながら、何を考えているのですか。」と和子に問いかけました。

和子が、「別に、何も考えておりませんが…。」と曖昧に答えると、修練長は、「仕事をすることはもちろん大切ですが、どういう気持ちで行うかという自分の在り方を忘れてはいけません。」と話しました。皿をテーブルに置き、隣にフォークやナイフを並べるという作業に、「つまらない仕事ばかりでうんざり…。」と思っていた和子の心の中を、修練長に見透かされていたのです。さらに修練長は、「同じお皿を並べるのなら、やがてこの席に座る一人一人のために祈りをささげながら並べてみてはどうですか。」と和子に伝えました。

それ以来、「仕事がおもしろくないと嘆く前に、発想を転換して、つまらない仕事も意味のある仕事に変えていけばいい。」と和子は考えるようになりました。

一九五九年、和子は、アメリカのボストンカレッジの大学院に進学しました。和子は、人生の中で「あの時以上に努力したことはない。」というほど必死で勉強しました。二年半で必要な単位を取得し、残りの半年は論文の作成に没頭しました。無理難題を与えられてもくじけずに、あきらめないで取り組むことで和子の道は開けていきました。

帰国後、和子はノートルダム清心女子大学に赴任し、三十六歳の若さで学長に就任しました。就任式で、和子は学生たちに次のような言葉を語りかけました。

「愛されるよりも愛することに、理解されるよりも理解することに、そして与えられるよりも与えることに喜びを見いだす人になってほしい。」

この言葉は、学長としてのこれからの自分自身に言い聞かせていたのかもしれません。学長になったばかりの頃は、何もかもが初めてで、会議や電話、来客の応対などに戸惑

〔学長に就任した頃の和子「強く、しなやかに」より〕
〔ノートルダム清心女子大学資料編纂室蔵〕

い、自信を失っていました。しかし、どんな時もこの言葉を思い出し、自分の「花」を咲かせようと決心し、自ら進んであいさつをしたり、お礼を言ったりするよう心がけました。すると次第に学校が明るくなってきました。「幸せは人や周りからもらうものではない。自分が変わることによって作り出すものである。」と和子は感じました。

その後、和子は学長として、若くて経験不足だと自覚しながらも使命を果たし続けました。青少年の教育を重視していた和子は、幼稚園や小学校教諭、社会福祉事業のスタッフ、カウンセラーの育成を目指し、学長に就任した翌年、大学に児童学科を新設し、子どもの自主性を育む教育を実践しました。

一九九〇年、和子は学長を退き、学園理事長となり、その仕事は亡くなる最後の日まで務めました。また、執筆活動や全国各地での講演も最晩年まで続けました。

「あくまで現場で最期を終えたい。いつどこで召し上げて下さっても良い。その間出来るだけ学生や先生に柔らかく優しく接していきたい。」との言葉通り、亡くなる直前まで教壇に立ち続け、生涯現役を貫きました。

和子のベストセラーである『置かれた場所で咲きなさい』には、生きる希望を与えてくれるたくさんの言葉が綴られています。

一九二七	旭川に生まれる
一九四五	キリスト教の洗礼を受ける（十八歳）
一九五六	ナミュール・ノートルダム修道女会に入会する（二十九歳）
一九五九	ボストンカレッジ大学院に入学する（三十二歳）
一九六三	ノートルダム清心女子大学学長に就任する（三十六歳）
二〇一二	ベストセラーになった「置かれた場所で咲きなさい」を刊行する（八十五歳）
二〇一六	岡山で死去する（八十九歳）

＊洗礼…キリスト教会で行われる入信の儀礼
＊シスター…カトリック教会の修道女
＊神父…カトリック教会の司祭に対する尊敬の意を表すためにに使う呼び名
＊修道女会…キリスト教の修道院内で共同生活をする女性の組織
＊修練院…カトリック教会の修道女会員の養成機関